

『ハーヴェイ・ミルク』と30年間の変化

中野 理恵

『ハーヴェイ・ミルク』は、ゲイをカムアウトして、全米で(恐らく世界でも)初の市政執行委員^{*}という公職に選出されたハーヴェイ・ミルクの活動と、彼の暗殺事件を追ったドキュメンタリー映画である。1984年に完成し、アカデミー賞最優秀記録映画賞をはじめ、数多くの映画賞を受賞。米国では当時、夜9時の時間帯にテレビ放映もされ、1985年には同性愛者のための "Harvey Milk High School" がニューヨークでオープンしている。

ハーヴェイ・ミルクは1930年米国東部生まれ。海軍から証券アナリストや前衛劇団での活動等を経て、1972年に移住したサンフランシスコで、パートナーのスコットとカメラ店を営む一方、反戦運動や住民運動に参加。1977年、47歳の時、4回目の挑戦で市政執行委員に選出され、同性愛者の人権擁護に尽力したが、11ヵ月後の1978年11月27日、同じく市政執行委員だったダン・ホワイトに、当時のマスコニー市長とともに市庁舎で暗殺されてしまう。

暗殺されるのを予感していたミルクが、事前に録音していた<遺言>から映画は始まり、ホワイトの裁判結果までを追う。「臆病な人にとっては、自分のような目立つゲイの活動家は格好なターゲットだと承知している。いつか殺されるかもしれないから、考えを誰かに伝えておきたい」「自分は運動の一部だと思ってきた」「希望を持つことが大切だ」「ゲイとカムアウトしよう」等、残された言葉は冷静で示唆に富む。

映画は、ミルクを直接知っていた人々―ゲイ、レズビアン、労働運動の活動家、中国系米人―などからの証言を軸に、彼が実際に町でチラシを配ったり、人々に話しかけたりする映像を使っているので、わかりやすい。同時にホワイトや保守派の人々の動向を紹介するのも、原題である "The Times of



©Black Sand Productions, INC.

Harvey Milk"、つまり<ミルクの時代>(ベトナム戦争後になる)を理解する助けになる。それにしても豊富な映像である。エプスタイン監督たちが当初は八ミリで撮影しながら、実際にミルクの活動に参加していたそうなので、可能だったのだろう。

では、暗殺者ホワイトの裁判はどうだったか。彼が市庁舎に入るのに窓をこじ開けて入ったことに対して、弁護士が「よくあることだ」と言っているのにも驚くが、評決はそれを上回る。<彼の行為はジャンクフードの摂り過ぎによるもので、懲役4年から12年、仮釈放も有り得る>と呆れるような内容なのだ。「彼がゲイでなく、市長が暗殺されただけだったら異なる判決になっただろう」と映画の中でも語られている。

最初の日本での上映から今年で32年の時を数えた。本稿のためにLGBTQをキーワードに検索すると、数多くの映画が表示される。30年間の変化が大きいと知った。日本社会が価値の多様性を許容し始めているのではないか、と思うこの頃である。

^{*}市政執行委員：原語は supervisor。議員とは異なり立法には関与せず、行政側から市政を監視する任務を担う。

《Cinema Information》

『ハーヴェイ・ミルク』

アメリカ映画 (87分)

監督：ロバート・エプスタイン

11月27日(金)よりアップリンク吉祥寺にて上映予定

なかのりえ：映画プロデューサー、ディストリビューター。(株)パンドラ代表。『ハーヴェイ・ミルク』を第1回配給作品として、これまでに100本を超える映画を配給し、視覚障がい者のための副音声付商業劇場上映を日本で初めて実現。著書に『すきな映画を仕事にして』(現代書館, 2018)等。